

地域づくり推進計画基本方針懇談会 前回懇談会までの振り返り

第1回懇談会(7/27)での意見

推進会議のあり方、地域自治の姿について

- 地域課題を発掘して行政の課題に転換する機能をどのように盛り込むかといった議論が必要
- 参加者は目の前の取組に注力してしまっている
- 地域課題から入るのが本当に正しいのか疑問。楽しいことから入り、以下にさまざまな年齢層にアピールして、地域の厚みをつくっていくことが重要
- 閉鎖的な場で検討するのではなく、自分たちから外に出ていくというオープンな姿勢が必要
- 素晴らしい取組は地域に既に存在する。情報共有の場が必要
- 30～40代などの若者世代、子どもたちや子育て世代、中高生の声の拾い上げや反映、関心を持ってもらえるように
- 企業や商店などとの関わりも重要
- 中学校区という単位は、地域によってはふさわしくない
- 地域自治の形も、地域の特性に応じてさまざまなパターンが考えられる

第2回懇談会(10/27)での意見

地域づくりの姿、推進会議のあり方について

- 推進会議によって地域づくりに取り組む目的を、行政において明らかにしてほしい
- あまり目的を意識しないことも時には必要
- 行政が新しい施策を実行する際に、この地域ではどのような形で運用するのが良いか、行政がヒアリングできる接点として機能するのが現実的
- 地域課題について行政と冷静に関わり、話し合える機能を推進会議に内蔵させたい
- 課題を共有することが重要
- 課題に対して、専門で活動している人の声や地域を越えて連携し、知恵を生かすといった視点を追加すべき
- 推進会議を設置することで壁ができてはいけない。推進会議が作られることで、他との関わりが広がるような取組が必要
- 単位を一律に定めることは難しい。取組ごとに柔軟に区分けが変更できるように
- 既存の取組は、参加のハードルが高く感じられるため、推進会議の取組は、すそ野を広げられるような活動・イベントを行う必要がある
- 「ゆるやかさ」と「楽しさ」は大切
- それぞれが望むいろいろな距離感で地域と関われるコミュニティをゴールにすることが重要
- 既に地域で個別に行われている活動が推進会議の場で交わることでつながりが広まるのではないか
- イベント・活動を定期的に継続することによって、「今度行ってみよう」という人が出てくる
- (宮崎市の事例から) 条例に基づく協議会を設置して構造化しても、担い手不足などの課題は解消されず、かえって「こなす」ことが目的となってしまう、地域のダイナミズムが失われてしまうのではないか

地域を支援する行政の施策について

- 地域の担い手養成講座は、実際の担い手として活動するアクションにつなげるために、どの程度活用されているかを実証、フォローアップが必要
- 人材バンクについて、既存の事業を活用する場合には、少し目的が合わなかったり、忙しくて実際の活動に参加できなかつたりということを考慮した工夫が必要
- 学校との連携は重要。小中学校だけでなく、高校や大学との連携も
- 地域の特色、それぞれの違いが生かされるような取組にすることが重要
- 地域担当職員制度については、まずは内部でしっかり議論すべき。全国で多くの事例があるが、成功事例は少ない